連載・イベント

ふるさと Something NEWS

第⑲回

東北復興にもチャレンジ・スピリットを！【後編】

――未来志向を「空気感」として

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp
代表理事 佐藤 建吉

▼「チャレンジ精神×東北復興＝未来志向」

第⑰回からのコラムのまとめをしたい。キーワードとして、ブルネル父子の「チャレンジ精神×東北復興＝未来志向」という等式を掲げた。これを、「ブルネル」・「父子」、「チャレンジ」・「精神」、「東北」・「復興」、「未来」・「志向」の8つに分けて概説することにする。

▼ブルネル・父子

「**ブルネル**」については、本コラムの前編・第⑰回で述べたように、フランスがルーツであるが、産業革命で息吹くイギリスで活躍したエンジニアであった。

父マーク・ブルネルは、シールド工法の発明者で、テムズ河底トンネルに適用した。彼は発明家でもあり、異国のイギリスで生活するために20件以上の特許を取得し、イギリスで生き残るためのポートフォリオとした。結果、マークは、「サー」の称号を得た。

子イザムバード・ブルネルは、父の期待に応え、彼は父を土台として、父以上の事績を成した。彼は、発明に見合う新技術や新機軸を打ち立てたが、特許は一切取らず、むしろ否定した。成長期や発展期に特許、特許と騒ぐ無駄を除いて社会の発展を第一とした。「テクノロジー・ファースト」、「デザイン・ファースト」のエンジニアともいえる。

「**父子**」は、血縁があるとすればDNAの繋がりである。が、過去や現代においても、養子縁組でも立派な父子関係である。家督を維持するために養子を迎え、父子となることもある。

筆者の友人の本多忠夫氏は、千葉県の大多喜城の初代城主であった本多忠勝の第25代目であるというが第2次大戦中に養子となり本多家の家系を守っている。

ブルネル家の場合、イザムバードには、3人の子がいたが、その家系には、曾曾曾孫のイザベラ・トーマスほかがいる。が、ブルネルの名前は、直系にはない。子ブルネルの姉ソフィアの子孫には、著名な彫刻家がおり、ブルネル大学で行われた展示会は、筆者も観覧した。

テイマー川に架かるロイヤル・アルバート橋

▼チャレンジ・精神

「**チャレンジ**」については、多くの人が肯定であるはずだ。しかし、高齢者では、「私は、チャレンジはもういい」という人も多い。なるほど、理解できないことではないが、「終活」という言葉があるように、その日に向かい企画や設計をしようとしている。

実は、マネジメントの分野では、「チャレンジ」は、「課題解決」と同義語あるという。ブルネルに関連した行事で、マネジメントを専門とする大学講師に通訳を依頼したが、彼女は課題解決をチャレンジと和訳していた。

この「課題解決＝チャレンジ」という解釈は、課題を棚上げするのではなく、課題に取り組み解決しようとする「**精神**」の現れとなる。そうした、前向きな精神を空気感としたい。

▼東北・復興

2011年3月11日の東日本大震災、本年6月18日の山形県沖地震。大災害では、被災状況がメディアでも取り上げられ、また「**東北**」が注目され、福島や鶴岡の地名が周知された。

3・11では、放射能汚染が福島のほか、東北や東日本へ甚大な被爆災害をもたらした。いま被爆障害が顕在化し、一方で風評被害はなお継続している。

2018年9月6日の北海道胆振東部地震では、北海道に衆目が集まった。同時に、広域にわたる大停電は、送配電の系統制御の脆弱性を露呈した。

これらは、東日本での出来事であった。対比されるのが、西日本である。電源周波数の相違、江戸文化や京文化の違いなど、東西地域には、独特の相違がある。

しかし西日本には、大災害がないということはなく、1995年1月17日の阪神・淡路大震災、2016年4月14日の熊本地震、2018（平成30）年6月28日からの西日本豪雨など、災害は東西を問わず頻発している。

東西の垣根は、飛行機や海上を使えば東京を越えて互いに交流できる。が、災害からの「**復興**」においては、東西の文化や経済の違いを活かしつつ行うべきである。対立から協調に、しかも相互依存の関係をつくりあげる必要があるだろう。

▼未来・志向

挑戦するエンジニア、ブルネルから、「未来志向」について、次の例から学びたい。

イングランドの南西部のプリマスは軍港で、その先のコーンウォール地方との境を流れるテイマー河に高架橋がある。1859年に子ブルネルの設計で完成したロイヤル・アルバート橋である。【写真】

この橋は、2スパンの長大橋であり、帆船が通ることができる高架橋でもある。その架橋は、レンズ状の1スパンを、個別に持ち上げ施工された。したがって工期の短縮化、工費の軽減化を実現できた。実に合理的な発想を具現化している。

ブルネルの行った設計は、レンズ状の橋桁から構造力学的作用が視覚できる。現代風に言えば、アフォーダンスの設計といえる。ブルネルの「**未来**」を取り入れた設計手法の典型でもある。

設計や企画は、常にトレードオフとの対話である。二面性や二極性へのマネジメントともいえる。ブルネルも数学を得意としたが、マネジメントの大家ドラッガーも数学を収めた。二人は、ともに芸術に深い洞察があった。ブルネルは、「構造芸術」という境地を「**志向**」し実現し、ドラッガーは、日本文化は二極性であり、二極性こそが重要であると述べ、浮世絵の収集家となり、学んだ。

未来志向は、未来に生き残るための企画や設計をすることである。この「**志向**」には、美的さが大事である。それが、永続性の基本となるだろう。

▼ピンチをチャンスに

未来に向けた復興には、現実を超えた視点が必要である。被害を受けた当事者には酷ではあるが、いまこそ次世代を見通した復興を行わなければならない。ブルネルの銅像の目線は、自らが挑戦し、失敗も経験し、なお、その先を見通している。

そのためには、SDGsに代表される持続可能な取り組みを空気感として、ピンチを払拭し、未来をデザインした東北復興の現場を創造したいものである。